

令和7年度 旧松山管内生徒指導夏季研修会 実施報告書

1 日 時 令和7年7月31日(木) 13:30~15:30

2 場 所 松山市青少年センター(3階大ホール)

3 講演内容

- ・ 演 題 「学校における生徒指導～自身の様々な経験を通して～」
- ・ 講 師 愛媛大学教職大学院 教育学研究科 研究員 田中 祐二 氏

(1) これからの組織貢献に向けて

以下の教師としての基本となる「資質・能力」が身に付いていることが、組織貢献へとつながっていく。同僚や子供、保護者、地域の方々から発せられる言動に、「すごい」と感じたり、思ったりすることが、自分がこれから身に付けるべき「資質・能力」である。「すごい」と思える力を「謙虚に素直に」プラスさせていく。こういった教師の力が集結されることで、組織は更にレベルアップする。

ア 気付きの力

子供の普段との様子の違いに気付くことが大切である。すると、子供は、「私のことを分かってくれている。」と感じたり、「あの子のことを放っておかなかった。」と思ったりする。普段との違いに気付き、声掛けをすることを通して、先生と児童生徒の信頼関係が確立されていく。

イ ボールを返す力

子供たちは、内に秘める思いがあるが、それを言葉として出さなかったり、出せなかったりすることがある。その秘められた思いやつぶやきをキャッチし、反応してボールを返すことで、子供との絆や信頼が深まる。

ウ 温かい雰囲気醸成する力

「人前に立つ」ことは、子供にとってとても勇気が必要である。そういった「ドキドキ感」を察することができる教師でありたい。「人前に立つ」子供は、教科や活動によって異なる。誰もが前に立つ側にも、支える側にもなり得る。教師の雰囲気が周りにも伝播する。温かく支える雰囲気を生み、子供の心が成長していくことで、学級や集団の雰囲気が醸成されていく。

(2) いじめの問題への対応

いじめ問題は、法律に基づいた対応が求められる。「組織で対応」することや「重大事態への対応」等、学校が取るべき対応について整理しておく必要がある。また、いじめや非行の問題には、発達障害や虐待といった背景がある場合がある。そういった子供の背景を把握しながら指導していく必要がある。

ア 聞き取り内容の分類

自分が直接見たこと、見ていないこと(真実)、人から聞いたこと(不確か)、分からない・覚えていないこと(対応できない)を確実に分類する。

イ 時系列の記録の蓄積

ささいなことも確実に記録を蓄積しておく。不確かな発言は避ける。

ウ 学校外の機関による対応

教育委員会にいち早く報告する。解決困難な事案は、第三者委員会に委ねる。弁護士には弁護士で対応すること。

(3) 安全配慮義務

ア 傷病者への対応

傷病者がいる際は、一人一人の様子や処置を時系列で記録しておく。また、その内容を保護者に迅速に連絡することが重要である。また、「ライブ映像 119」やAEDを活用することとで、子供の命を救うことができる。地域の方や一般生徒に対応する教職員の存在も必要である。

イ マスコミ対応

報道内容は、学校の浮き沈みに大きく影響を及ぼすことがある。

ウ 保護者への対応

報道各社によってニュアンスの違う報道がされるが、その記事の一部が噂となる。また、保護者は、SNSでつながっている。一つの負の対応が、何十倍、何百倍にもなり、取り返しのつかない事態へと発展することがあるという認識が必要である。したがって、日頃から学校と子供、保護者等との信頼度を高めておくことが大切である。

(4) これまでの経験から

- 学校の全教職員が様々な役割を分担
- 全教職員、一丸となって動く
- 地域や保護者を巻き込んでいく
- 地域に出向いてなんぼ
- 人は役職ではなく、人間性が全て
- 正しいことは正しい、ダメなことはダメ！
- 真っ向勝負！！
- 本気度は、子供に、親に伝わる



<写真 田中氏の講演の様子>

(5) 生徒指導主事に伝えたいこと

- 「危機管理」とは、最低、最悪の結果を予測し、最高の準備をし、あとは楽観的に対応すること。
- 「命」にかかわることは即行動
- クールな診断、ホットな指導
- 何が子供を動かすのか、それは先生の本気度である。

(6) 質疑応答

(参加者)「不登校児童に対応していても、手ごたえがない時のアプローチの方法は。」

(田中氏)「学校だけで抱え込まず、どの機関でもよいため、その子供が誰かと関わっているようにする。誰ともつながっていないことは避けたい。」